

『浜松中納言物語』と『更級日記』の夢

河合 隼雄

はじめに

日本の王朝物語には、夢がよく出てくる。物語によって、その頻度、重要性において異同はあるが、一般的に言って、夢が意味あるものとして取りあげられている。同時代に編集された説話集においても同様である。これらの事実は、当時の人々が夢を大切なものとして受けとめていたことを示している。

筆者は心理療法を行なう上で、夢を非常に重要な素材として用いている。ここに、現代の深層心理学における夢理論を展開する意図はないが、端的に言えば、夢をその夢を見た人の無意識の在り方を示すものとして受けとめるのである。夢は世界の多くの文化圏で、古代においては、神の声を伝えるものとして大切にされた。そのような傾向はある程度の紆余曲折を経ながらも長く続くが、西洋にお

ける啓蒙時代の出現によって、一挙に逆転させられる。夢は荒唐無稽なものとして退けられ、夢に意味を見出すのなどは、まったく迷信と考えられるようになった。

西洋近代の合理精神は科学・技術の発展に見られるような大きな成果をあげ、それは今世紀に頂点に達したかのように思われる。しかし、それと共に精神と肉体、理性と本能（などという考え方自体が問題とも言えるが）などの間に深い分裂が生じ、多くの心の病を生み出すようになった。あるいは、心身症などという心のこととも体のこととも決めかねる病気が多く生じたことになった。このような分裂を癒すためには、西洋近代に確立された自我、その意識の在り方をよく検討し、それを超える道を見出していくことが必要と考えられる。おそらく、次の世紀はそのことが大きい課題となるであろう。

ポストモダンの意識の在り方を探る上において、プレモダンの意識の在り方を再検討することは大いに意義あることと思う。プレモダンの意識を「不合理」、「非論理的」というように単純に切り棄てるのではなく、深層心理学の用語を用いて言えば、意識と無意識の境界をあいまいにすることによって、むしろそこに得られた現実に関する知恵を再評価することが必要である。そこから、単純な逆転を行ない、「現代より古代」、「西洋よりも東洋」などというスローガンにとびつくことは危険極まりないことであるが、前記の態度で慎重に検討することによって、古い素材から、現代に生きる上での示唆を得られるであろう。

以上のような観点に立つならば、西洋近代において一度否定された、夢の価値を、あらたな角度から見直す意義が感じられる。筆者はこのような考えに立って、現代人の夢を臨床の実際にも用い、研究してきている。その方法によって、日本の王朝物語に語られる多くの夢を研究することもまた、意義なしとはしないであろう。

既に筆者は、日本の中世説話や、王朝物語のなかの夢、あるいは中世の禅僧、明恵の『夢記』などを取りあげ、国内外において発表してきた¹⁾。本論もその一貫として、一九九五年にスイスのアスコナにおいて行なわれたエラノス会議に発表したものを骨子として、より詳細な資料を付して論じるものである。

ここに特に『浜松中納言物語』と『更級日記』²⁾を取りあげたのは、

両作品ともに夢を多く取りあげているのみならず、これは菅原孝標の娘という同一人物によって書かれたという、専門家の意見が多いからである。後者の点についての文献学的考察は専門家に譲るとして、ともかく、両者の夢、およびそれに対する作者の態度の特徴などについて考察してみたい。それに一方は「物語」であるのに対して、他方は「日記」であるという事実も興味深い。一応この「日記」はフィクションではないことを前提としてではあるが、「物語」³⁾と「日記」の夢を比較してみることは興味深いことである。そして、『浜松中納言物語』と『更級日記』は、これまでの国文学者の研究によって、作者は同一人物であるという結論には固まっているようだが、両者における、夢に対する著者の態度を比較検討することによって、著者が同一かどうかという問題に対しても間接的ではあるが、発言できることになるであろう。

『浜松中納言物語』の夢

『浜松中納言物語』のごく簡単な筋立を述べながら、そのなかに語られる夢を紹介する。この物語は夢と共にすすむようなもので、夢を抜きにしては物語を紹介できないと言ってもいいだろう。

この物語は五巻より成るが、巻一の前に散佚首巻のあることがその後の研究によって明らかにされている。主人公の中納言は父を亡い、母と暮らしている。母の許に通う大将の愛娘の大君と中納言は

通じ合う仲となる。中納言の夢に亡父が現われ、「唐の第三王子として転生している」と告げる。(夢1) この夢を信じた中納言は、母や大君を振り切つて唐に渡る。

これが散佚首巻に語られることであるが、冒頭から、「転生」とか「夢のお告げ」というテーマが現われるのが特徴的である。

巻一では中納言が渡唐、目出たく父親に会うと言つても、子どもだが。そして、その子の母、唐后(河陽県の後)を垣間見て一目ぼれしてしまふ。ところで、唐後の父はかつて日本に渡り、そこで日本の女(後に吉野の尼君と呼ばれて二巻に登場)との間に一女を儲けた。それが唐后である。彼は中国に帰るとき娘を連れ帰るかに迷つた。そこで「海の龍王」に多くのことを願つた夢を見る。夢のなかで、龍王は「はやく(あ)いてわたれ。これはかの国の后なれば、たい(お)らかに渡りなん」という。(夢2) 彼はこの夢に従つて娘を連れて帰唐し、娘は夢告のとおり、唐后となつた。

中納言は唐后に恋するが、日本に居る大君を忘れていたわけではない。その大君が突然、彼の夢に現われ、泣きながら、「誰により涙の海に身を沈めしほるゝあまとなりぬとか知る」

と言ふ。(夢3) 中納言はこの夢を見たときには思いつかなかつたが、この歌のあま(海女)は、尼にも通じるわけで、このとき大君は剃髪して尼となつており、重要な事実を告げる夢であつた。

中納言の唐后への想いは深くなるばかり。そうとは知らぬ唐の一

の大臣がその娘、五の君を中納言と一夜を過ごすよう計らうが、中納言は礼をつくしながら手も触れない。ひたすら河陽県の後に会いたいと思つて、ある寺に参詣したときも、そのことのみを念ずると、夢にその寺の僧らしいのが現われ、

「今一めよそにやはみんなこの世にはさすがに深き中のちぎりぞ」

と言ふ。(夢4)

その後、中納言はまったく偶然に物忌に来ていた后と、后とは知らずに結ばれる。後になつて彼女が后であつたことを知る。しかも、そのときに彼女は懐妊し若君を生む。このときになつて、中納言は夢の告げる宿縁に思い到る。

在唐三年後に中納言は帰国することになる。彼は自分の子とは対面できたが、河陽県の後とは逢うことができず、帰国の気持さえ定まらなかつた。このとき母親が夢に現われ、帰国を待つ心を語る。

(夢5) 中納言は帰国に際し、自分の子を連れて帰りたいと欲するが、若君の母親、河陽県の後はどうするべきか迷う。そのとき夢に現われた人が、「これはこの世の人にてあるべからず、日本のかためなり、たゞ疾くわたし給へ」という。(夢6) これによつて后は若君を中納言に託すことに決める。

巻二では、中納言は帰国、大君が尼になつたことを知る。京に帰り尼大君と、その娘に対面する。河陽県の後より託された文箱を見て、彼女の母親の切々たる情を知る。中納言は吉野にいる唐後の母

の尼を訪ねることにする。この巻には夢はない。

巻三において、中納言は吉野の尼君を訪ねる。河陽郡の后からの文箱をもっていくが、吉野の尼君はその日の暁に既に夢で「もろこしの後の見え給へりければ、片つ方の心にはおぼしやりつつを（ま）こなひ暮し給けるに、かゝることなどうちきゝつけ給へる心ち、夢か何ぞと胸つぶれて」ということになる。（夢7）

吉野の尼君はその娘（唐后の異父妹）と暮らしており、その姫君の行末のみを案じて、三年にわたって祈願していると、「いとたう（ま）とげな僧」が夢に現われて、

「もろこしの後の、よるひるわが親のおはすらんありさまを、えきゝ知らぬ悲しさをなげき給ひて、いかでかおはすらんありさまを聞かんと、明暮なげき仏を念じ給孝の心いみじくあはれなれど、異世界の人になりて、わかれてのち、この思ひかなふべうもあらねば、この世の人に縁を結びて、深き心をしめさせて、物思ひの切なるゆへに、あつかはせんとはうべんし給へるに、ここに又このむすめのたづきを見をきて、心やすく後生いのらんとおもひたまふ心の一つにゆきあひて、この姫君のたづきも、この人なるべきぞ」

と語り。そこで「われを助けんとて、仏の変じたまへる人にこそあんなれ」と思い、拜んだ。（夢8）

また実際に中納言も姫君の世話を約束するので、尼君は夢のお告げを有難く思う。中納言も姫君に対して心を寄せる。

他方、中納言は尼大君に対して清浄な交りを誓いながらも、気持が押さえられず添臥しをしたりする。彼女は罪を恐れて別居を願うが、中納言は屋敷内に尼大君のための住居をつくる。

巻四で、中納言は「吉野の山の入道の宮の御事の、うちしきり夢に見えて」、（夢9）吉野をあわてて訪ねる。尼君は病のために死亡する。尼君が死んで後、中納言は吉野の姫君を京都に引きとる。

中納言は唐后のことをしきりに想っていると、正月十余日頃から「かうやうけんの后、つゆもまどろめば、いみじうなやみわづらひ給うとのみ」夢に見てうなされる。（夢10）それですます唐后のことが案じられてくる。三月十六日、中納言は吉野の姫と月を眺め、唐后と一夜の契りを交したのは今宵であつたと思ひ、琴を弾く。夜更けになつて寢覚に月を見ていると、空にあらん限りの声がして、「かうやうけんの后、今ぞこの世の縁尽きて、天に生まれ給ひぬる」と言う。はつきり三度も声が聞こえ、傍にいた若君もおびえて泣き出すほどであつた。（幻聴体験）これが事実であつたことは、翌年に唐の宰相からの便りによつて確かめられた。

中納言は吉野の姫を京都に迎えるが、姫が二十歳になるまでに契ると不幸になるとの戒めを老僧から受けて、それを守る。姫は病氣になり回復が思わしくないので清水寺に参籠する。このとき、かねてより姫を狙っていた好色な式部卿官は彼女を盗みだす好機であると思う。

巻五において、中納言は吉野の姫が清水寺で失踪したことを知らされ、驚き悲しむ。姫の行方の知れぬまま悲嘆にくれている中納言は、「せめていさゝかまどろめば、(姫が)あるかなきかのさまにのみじう泣き歎きて、かたはらにもやし給とのみおぼゆる」(夢11)ので、姫が自分のことを思っていてくれるのだとわかる。しかし、

助ける方法もない。そのうちに中納言の夢に、河陽県の後が彼が最初に垣間見たときの姿であらわれ、「身をかへても一つ世にあらん事いのり思す心にひかれて、今しばしありぬべかりし命つきて、天にしばしありつれど、我もふかくあはれと思ひ聞えしかば、かうおぼし歎くめる人の御はらになんやどりぬる也。薬王品をいみじうたもちたりしかども、我も人も浅からぬあひなき思ひにひかれて、猶女の身となん生まるべき」と言う。(夢12)

中納言は唐后がこの世に再生してくると、しかも吉野の姫の子となること、を知り嬉しく思うが、他方、これは姫が既に懐妊していることを意味すると知り、悲しく思う。

一方、吉野の姫は式部卿宮にかくまわれて悲しい日を送っているが、「はつかにまどろむともなく、消えいる時には、かたはらに中納言のおはする心ちのするを、うつつかと目をあげたれば、それにはあらぬ人の、泣く／＼添ひ臥し給へるも、はてには夢かうつつかともおぼえず」という状態になる。(夢13)これは文中にもあるように、夢か幻覚体験かわからないようだが、一応、「夢」というこ

とにしておく。

姫の衰弱があまりに著しいので式部卿宮は彼女を中納言に返し、そこに通ってくる。中納言は姫を自邸に引取り、自分の母や尼大君とも対面させる。それにしても結局は姫と添うことの出来ぬ宿世を嘆く、というところで話は終る。

以上、『浜松中納言物語』のごく簡単な筋を述べながら、そこに示されている夢をすべて紹介した。もっとも、はっきりと幻聴として表現されているものや、幻覚か夢か定かでないものもあるが、すべて、それにかかわる人の内的世界を表わすものとして同等に取扱うことにした。われわれは臨床の実際においても、同様の態度によっているわけである。あまり細かい分類を試みても意味がないだろう。

『更級日記』の夢

『浜松中納言物語』の夢をすべて紹介したが、同様に『更級日記』に語られる夢をすべて、ここに示すことにする。これによって両者の比較が容易になるであろう。『更級日記』は菅原孝標の娘によって書かれ、彼女が十二、三歳の頃、上総国に居たときから、夫と死別した一、二年後まで、約四十年余りの期間の彼女の生活について述べられる。しかし、それはいわゆる「日記」ではなく、晩年になって彼女の到達した一つの観点から自分の生涯を回想して書かれた

ものと言われている。ここに、『更級日記』の筋に沿いながら、それに記されている彼女の夢を紹介していくことにする。

作者は父親の任地である上総国で育つが、継母や姉の話聞いて、物語というものに心惹かれ、何とかしてそれを読みたいと思う。等身大の薬師如来像を造り、それに対して、早く京都に行つて物語を沢山見られるようにと祈つたりする。十三歳のとき、父親の任期が終り上京することになった。

途中の旅の描写があるが、それは省略する。継母が父親との折合いがよくなく去つて行つたり、乳母と死別したりする。しかし、伯母から念願の『源氏物語』をもらい、それに熱中する。そのときに夢を見る。

「夢に、いときよげなる僧の黄なる地の袈裟着たるが来て、『法華経五の巻をとくならへ』といふて見れど、人に語らず、ならはむとも思ひかけず、物語の事をのみ心にしめて」いるという有様であった。(夢1)

この夢に出てくる「法華経五の巻」というのは、そこに女性も成仏し得ることが説かれているという点で、おそらく当時の上流階級の女性にはよく知られていたものと思われる。仏教では一般に女性は成仏できないと考えられており、それをそのまま信じている人も多かったが、それに対して「法華経五の巻」は女性の成仏を説く点で特異なものであった。

続いて作者が十五歳の頃、相変らず物語に傾倒していたとき、次のような夢を見る。

「このごろ皇太后宮の一品の宮の御料にかけたるに、六角堂に遣水をなむ作る」といふ人あるを、『そはいかに』と問へば、『天照御神を念じませ』といふ(夢2)

このときも、夢を人に話すこともなく、なんとも思わず、そのままになつてしまつた。

同じく作者十五歳の頃。花の散る季節に、その季節に亡くなつた侍従大納言の姫君の筆跡を繰り返し見て悲しい思いをしていた。五月頃、どこからともなく猫が迷いこんでくる。かわいいので姉と二人で秘かに飼うことにする。猫は二人になつくが、姉が病氣になつたので、猫を用人人たちのいる「北面」の部屋にばかり居させておいた。すると病氣の姉が目を覚まし、猫をこちらに連れてくるようにと言う。それは姉が次のような夢を見たからだと言う。

「夢に、この猫のかたはらに来て、『おのれは、侍従の大納言殿の御むすめのかくなりたるなり、さるべき縁のいささかありて、この君のすずろにあはれと思ひいで給へば、ただしばしここにあるを、この頃下衆げすの中にありて、いみじうわびしきこと』といひて、いみじう泣くさまは、あてにあてをかしげなる人と見えて、うちおどろきたれば、この猫の声にてありつるが、いみじくあはれなるなり」

(夢3)

これを聞いて、猫をそれ以後は使用人の部屋に行かせず大切にした。猫に対して、「侍従大納言の姫君のおはするな。大納言殿に知らせ奉らばや」と言うのと、自分の顔を見てやわらかな声でなく、普通の猫とは思われない。これは、輪廻転生がテーマになっている夢である。作者ではなく、作者の姉の見た夢であるが。

作者二十六—二十九歳の頃、父親は常陸に赴任する。その間に清水寺に作者は参籠するが、あまり身をいれてできないと思っっているうちにうとうとと眠り夢を見た。

「御帳の方の犬防ぎの内に、青き織物の衣を着て、錦を頭にもかづき足にもはいたる僧の、別当とおぼしきがより来て、「行先のあはれならむも知らず、さもよしなし事のみ」と、うちむづかりて、御帳の内にいりぬ」(夢4)

「来世が大事であることも知らずに、つまらないことばかり考えて」と僧が忠告したのであるが、このときも作者はあまり心にとめなかった。

同じ頃、作者の母が一尺の鏡を鑄造させて、自分たちの代りに僧を使者として、初瀬に詣らせ、三日間参籠して娘(作者)の将来についての夢告を得るようにする。僧は帰ってきて次のような夢を報告する。

「御帳の方より、いみじうけだかう清げにおはする女の、うるはしくさうぞき給へるが、奉りし鏡をひきさげで、『この鏡には文やそ

ひたりし』と問ひ給へば、かしこまりて、『文も候らはざりき。この鏡をなむ奉れと侍りし』と答へ奉れば、『あやしかりける事かな。文そふべきを』とて、『この鏡を、こなたにうつれる影を見よ。これみれば、あはれに悲しきぞ』とて、さめざめと泣き給ふを、見れば、ふしまるび泣き嘆きたる影うつれり。『この影を見れば、いみじう悲しな。これ見よ』とて、いま片つかたにうつれる影を見せ給へば、御簾ども青やかに、几帳おし出でたる下より、いろ／＼の衣こぼれ出で、梅桜さきたるに、鶯木づたひ鳴きたるを見せて、『これを見るは嬉しな』と宣ふとなむ見えし」(夢5)

当時、初瀬に参籠して夢告を待つこと⁽⁴⁾や、それに代人を立てることなどの風習があったことがよくわかる。この夢についても作者はさして気にとめなかった。しかし、晩年になって、夫が死亡したとき、この鏡の夢の悲しい姿だけが、現実になってしまったと嘆く。

作者は三十二歳のときに、人にすすめられて宮仕えに出る。その頃に、自分の「前世」についての夢を見る。それについて作者は「ひじりなどすら、前の世のこと夢に見るは、いとかたかなるを」という書き出しで、次のように記している。

「清水の礼堂にゐたれば、別当とおぼしき人出で来て、『そこは前の生に、この御寺の僧にてなむありし。仏師にて、仏をいと多く造奉りし功德によりて、ありし素姓まさりて、人と生まれたるなり。

この御堂の東におはする丈六の仏は、そこの造りたりしなり。箔を

押しさして亡くなりにしぞ』と。『あないみじ。さは、あれに箔押し奉らむ』といへば、『亡くなりにはかば、異人箔押し奉りて異人供養もしてし』と(夢6)

せつかく前世の夢を見たが、作者はその後、清水寺に熱心に詣ることこそせず、もしそうしておればよかつたのにと晩年には残念に思つたことをつけ加えている。

作者は宮仕えをやめ結婚する。その後は家庭の雑事に追われ、物語のことも忘れるほどになる。三十八歳のとき、後生を祈つて石山に参籠し、夢を見る。少しまどろんだ間に、

「中堂より麝香給はりぬ。とくかしこへ告げよ」と言ふ人あるに、うちおどろきたれば、夢なりけりと思ふ(夢7)

このとき作者は、よい夢なのだろうと思つたとのこと。ただそれ以上のことは何も述べられていない。

三十九歳のとき、初瀬に詣る。このときは大嘗会の御禊の行なわれる日で、京都はにぎわっているときに逆行して、お寺詣りに出発する。これに対して賛否両論の意見が人々によって述べられるのを、作者はよく記述している。初瀬詣りの途中に泊つた寺で夢を見た。

「いみじくやむごとなく清らなる女のおはするに参りたれば、風いみじう吹く。見つけて、うち笑みて、『何しにおはしつるぞ』と問ひ給へば、『いかでかは参らざらむ』と申せば、『そこは内にこそあらむとすれ、博士の命婦をこそよくかたらはめ』とのたまふ(夢

8)

この後初瀬に三日間参籠して、暁に退出しようという前の夜、ふと眠つたとき夢を見た。

「み堂の方より、『すは稻荷より賜はるしるしの杉よ』とて、物を投げ出づるようにする(夢9)

四十歳を過ぎ、昔の宮仕えの頃を思い出し、その頃親しく話し合つた人が筑前にいるのを恋しく思いつつ寝いってしまったときに夢を見た。

「宮に参りあひて、うつつにありしやうにてありと見て、うちおどろきたり」

目が覚めると、月は西の山の端に近くなつてしまつている。そこで歌をよんだ。(夢10)

夢さめて寢覚めのとこの浮くばかり恋ひきと告げよ西へゆく月次に最後の夢は作者にとつても非常に大切な夢で、それを紹介する。これは作者四十八歳のときで、この夢のみは、天喜三年十月十三日と日付が付してある。

「あたる所の家のつままの庭に阿弥陀仏立ちたまへり。さだかには見えたまはず、霧一重隔たれるやうに透きて見え給ふを、せめて絶間に見奉れば、蓮花の座の土をあがりたる高さ三四尺、仏の御たけ六尺ばかりにて、金色光り輝き給ひて御手かたつ方はひろげたるやうに、いまかたつ方には印をつくり給ひたるを、こと人の目には見つ

け奉らず、我一人見奉るに、さすがに、いみじくけ恐ろしければ、
 簾のもとに近く寄りても見え奉らねば、仏、「さは、この度は帰り
 て、のちに迎へに来む」とのたまふ声、わが耳一つに聞えて、人は
 え聞きつけずと見るに、うち驚きたれば十四日なり。この夢ばかり
 ぞ後の頼みとしける」(夢11)

文中に示されているように、作者はこの夢を非常に大切に受けと
 めている。そして注目すべきことは、この夢の記録を、それより三
 年前に生じた夫の死の記述の次に載せていることである。まったく
 思いがけない夫の死を悲しむ文の後に、わざわざこれをもってきて
 いるのは、この夢が作者の晩年の境地を支えるものであり、そのよ
 うな人生観の上に立って、この『更級日記』が書かれたことを示し
 ていると思われる。この夢は何の解釈も不要で、そのままが重い意
 味をもっている。

夢と現実

『浜松中納言物語』と『更級日記』に語られる夢をすべて紹介した。
 特に前者の場合、幻覚体験などで夢と明確に区別し難いものもある
 が、同じ性格を有するものとして扱うことにした。

これらのすべての夢について考える上で、まず夢と現実との区別、
 その関係ということが問題となる。『浜松中納言物語』を読んでい
 て、非常に特徴的なのは、夢を見ているときの描写に「夢」という

語が、むしろあまり使用されないことである。たとえば、先に(夢
 3)としてあげておいた中納言の夢のところの原文を見てみると、
 中納言が河陽県の後のことを想い、また日本に残してきた大君とは
 それほど似ていないなどと思っているところで、「大将殿姫君(大
 君)、いみじく物思へるさまにながめおぼし入りたるかたはらに寄
 りて、……」という具合に文が展開するので、ほんやり読んでいた
 ら、急に大君が実際現われたのかと思ってしまう。それに続いて大
 君の歌があり、中納言も「われとほろほろと泣くと思ふに、涙にお
 ぼゝれて、うちおどろきぬるなごり、身に添へる心地して……」と
 続く。この「うちおどろきぬ」は「ふと目が覚める」、「びっくりす
 る」の両義があり、この際は前者で、ここにきて中納言が夢を見て
 いたことがわかるのだが、後者の意にとつて読んでみると、夢だっ
 たことがわからずに、実際に大君が現われたのだと思ってしまうか
 も知れない。現実と夢との境界が実に薄く、両者が入り混るような
 感じで描写される。

これについて、『浜松中納言物語』の英訳者、トーマス・ローリ
 ックは、これを物語のひとつの「話法」と考え、「夢が話の流れの
 なかに混入してくる、この話法は、この著者にとって夢と現実の世
 界は、われわれ(近代欧米人・訳注)が期待するように明確に区別
 される世界ではないことのひとつの指標である」と述べている。⁽³⁾

これと逆の関係とも言えるが、現実の出来事が「夢」として語ら

れることもある。もつともよく『浜松中納言物語』に出てくるのは、主人公の中納言が思いがけず河陽県の后と一夜をともしたことを、「春の夜の夢」として記述されることである。

現実に生じたことが「夢」として語られ、夢を見ると、「夢」という語が用いられない。これは『浜松中納言物語』にしばしば用いられる方法である。これに反して、『更級日記』では、夢を見たときには、「夢」という語がほとんどすべて用いられている。このことは、作者が「物語」の手法として、上述のようなことを意識的に用いたのではないかと思われる。

ところで、現実と夢との境界が薄い、という表現をしたが、これは何を意味しているのだろうか。これは、当時の人たちが夢と現実とを区別できず、両者をまったく同じことと思っていたことを意味するのだろうか。決してそんなことはない。夢と現実の境界が薄いというのは、両者共に同等の重みをもって受けとめられた、あるいは、むしろ夢の方が重く受けとめられることさえあった、ことを意味しているが、両者が混同されることはない。この点をよく注意しておかないと、現代人は夢と現実を明確に区別しているのに、平安時代の人はそれさえ出来ないような低い（あるいは未熟な）思考力とか意識をもっていたように誤解してしまうからである。

むしろ、西洋近代の啓蒙主義以後、近代人は昔からあった夢の意義を見出す態度を見失ってしまった点を反省すべきだと思われる。

夢はすなわち「非現実」とか「無意味」と断定してしまうことは、近代人一般の犯す誤りである。この点をよく弁えて、王朝物語を読むことが必要である。

『浜松中納言物語』の夢を見ると、それらが外的現実と極めて密接に関連していることがわかる。中納言は唐に居て、夢によって大君の出家を知る（もつとも、このときは明確に知ったのではなかったが）。あるいは、京都に居て、吉野の尼君の病氣を知り、唐にいる河陽県の后の死を知る。こんな馬鹿なことはない、と言う人もあろうが、筆者のように夢分析の仕事をしていると、このような現象は起こることを実際に体験する。「なぜか」と問われた場合、現在われわれのもっている自然科学の知識体系によっては説明できない。ここで、無理な説明をすると偽科学になる。さりとて、現在の知識体系で説明できないから、そんな現象はないと断定するのも非科学的である。ともかく、このような現象のあることを、説明抜きで認めねばならない。

『浜松中納言物語』においては、夢は現実を知らせるよりも、もつと重く、それは将来を予見し、その予見によって命令を与えてくるほどの重みをもっている。（夢2、6）こうなってくると、「夢のお告げ」を信じるなどは、まったくの迷信である。たとえば、夢で「人を殺せ」と命令されたら殺人をするのか、ということになるだろう。

これに対しても現代人が外的現実に対するのと同様と考えるとよ
いだろう。われわれも他人から忠告されたり、時には命令されたり
する。しかし、最終決定は自分の判断によっている。この際、他か
らのはたらきかけにどの程度身をまかせるか、自と他の距離をどの
程度とるかが問題となる。王朝時代の人々が夢に対して相当な信頼
をおいていたことは事実であるが、まったく同調していたわけでも
ない。その距離の取り方はむしろ『更級日記』の方に見られると言
っていいだろう。

王朝時代の人が夢に対してある程度の距離をもちつつ尊重してい
たことは、彼らが弁解をするときに、「見ていない夢」を「夢」と
してうまく使っている態度に示される。このことは既に「とりかへ
ばや物語」について論じたときに述べているので省略するが、『浜
松中納言物語』のなかにも、このような夢による弁解が認められる。
夢が弁解の理由になるという点で、それは外的現実と同等の重みを
もつことを示し、「嘘」の夢を意図的に使用する点で、彼らが夢に
対しても適当な距離をもっていたことを示すと考えられる。夢は必
ずしも彼らにとって「絶対」ではなかった。

次に『更級日記』の夢を見てみよう。これを一見すると、むしろ
『浜松中納言物語』の逆の傾向を示していると言える。つまり、作
者の見た夢は、ほとんどすべて外的現実とかかわりをもたず、時に
「夢解き」をしてもらっても、それも役に立たない。最後の夢を除

くと唯一つだけ、思い当るとすると、夢5において、僧が悲嬉面
の夢を報告したが、そのうちの悲しい方のみが、夫の急死に際して
思い出されるくらいのものである。

このような点に注目すると、果して『浜松中納言物語』と『更級
日記』は同一の作者によって書かれたものと考えられるのか、疑問
を抱いてしまう。どちらも多くの夢を取りあげている点では同様だ
が、その内容がまったく異なる。池田利夫も指摘しているとおり、
『浜松では夢解きが一度も行われていない。それを必要としない程
夢の内容が明白だから』⁽⁷⁾ということなのに対して、『更級日記』の
夢は、意味もわかりにくく、夢解きをしてもらっても、それは外的
現実と結びついて来ない。

ところが、『更級日記』において注目すべきは、最後の夢である。
夢11は、本人も「この夢ばかりぞ後の頼みとしける」と述べている。
金色に光り輝く阿弥陀仏が現われ、しかもそれは本人にのみ見える
し、その声も他人には聞こえないという状況のなかで、阿弥陀仏が、
今回はこれで帰るが、またあとで迎えに来ることを約束してくれる。
この夢を作者はまさに「現実」と受けとめて有難く思っている。当
時の人々にとっては、死後に涅槃に生まれかわることは、最大の願
いだったから、これは作者にとって、またとない大切な夢であった。
『更級日記』の作者が夢11によって知り得た「現実」は内的現実と
言ってもいいかも知れない。それは『浜松中納言物語』の夢が関連す

る現実、私的現実とはレベルの異なるものである。

夢体験と物語

『更級日記』の夢は、一見『浜松中納言物語』の夢と著しく性格を異にしているように見えたが、前者の最後に語られる夢は、むしろ後者に語られる夢のように、「現実」との関連が深いものと思われた。

ここで、『更級日記』の作者の作品に対する態度を考えてみると、既に国文学研究者の論じているように、現在われわれが考えるような「日記」ではなく、晩年になって作者が自分の生涯を振り返って書こうとしたものである。とすると夢11はこの全作品のなかで非常に重要な位置を占めていることがわかる。つまり、ここを作者の立脚点として、それによって作品の全体の構成を考えただけではないかと考えられる。

夢は時に、夢11に示されるように、人生において非常に決定的な役割をもっている。そして、作者がそれによって得たことは、死後の平安の確信である。そのような立脚地から、自分の人生全般を見ることが必要と思われるが、孝標女にしてみれば、自分は若いときから、相当に大切な夢を見ていたが、それに対して、もうひとつ本気がかかわって来なかった。そのなかでも今記憶しているのを記してみると、夢1から10までになる、という態度で『更級日記』を書

いたのでは、というように、この夢のシリーズを読みとめることはできないだろうか。

もつとつこんで考えると、作者はもともと夢の重要性については相当認識していたのではないかと思われる。なぜかと言えば、さもなければ、五十歳近くの晩年になって、十四歳や十五歳に見た夢を覚えていて報告することなどできるであろうか。その他の夢にしても相当詳細に記憶している。これはあるいは記録を残していたのではないかと思うほどである。⁽⁸⁾このようにして夢を大切に考えてきたので、とうとう晩年になって夢11の心境に達することができた、と考えてみてはどうであろうか。

そこで、彼女が全体の構成を考える際に、夢11の意義を強調しようとして、これほど夢は重要であるのに、自分はその本当のところから来たのだ、という方を特に強く述べようとする。従って、十四歳のときに「法華經五の巻をとくならへ」などという夢を見ること自体、仏教にも夢にも相当な関心をもっていることを示しているが、彼女はむしろ最後の到達点に比して、自分はこれを気にもとめずに来て残念だった、というような裏側からの言う表現法をとったのではないかと思われる。これと同じような表現法は、夢4、6、9などの場合にも認められる。

このような夢によって自分の信仰の深いことや、夢を重要と考えていることを読者に押しつけるようなもの言いをするよりも、自分

の例を否定的に示す方がいと作者は考えたのではなからうか。従って、一見すると、夢と現実との齟齬を嘆いてばかりいるようだが、結局のところは、作者が言いたいのは、夢体験の重要性ということと思われる。『更級日記』の夢を丹念に調べた池田利夫も「夢は彼女にとって信仰であったと言つて良い」と結論づけている。

このような夢体験をもち、それを「日記」としてではなく「物語」として語るとなると、どうなるであらうか。「物語る」ことの意味については既に他に論じたので、ここではごく簡単に述べる。外的な現実を他人に伝えるためには、その事実を記述することが必要である。正確な記述によって、それは他に伝わるであらう。ところが、内的体験を他人に伝えるためには、「物語る」ことが必要になる。特に自分の体験を他人にも追体験してもらつたためには「物語る」ことが必要である。非常に単純な例として、釣りで思いがけない大きい魚を釣ったとき、その事実のみを伝えるのなら、魚の体長や重さなどを記述するだけでいい。しかし、それを釣ったときの「感激」を伝えるためには、「物語る」必要がある。両手を広げて示す魚の大きさは、必ずしも、魚の大きさと確実に一致している必要はない。かくて、多くの釣りの「物語」が生み出される。

あるいは、自分の体験したことでも、それを自分の心のなかに「収める」ためには物語が必要である。地震を体験したとき、それをただ黙つて自分の心のなかに入れこむことは非常に難しい。それ

を他人に「物語る」ことによって、自分のものになったり、心に収まってくる。

このように考えてくると、孝標女が『更級日記』に述べている、夢11のような体験を人に伝えようとして「物語る」とき、それは『浜松中納言物語』のようになる、という推察が成立する。つまり、人間にとって夢がいかに大切であり、それがどれほど人間の生涯の流れに影響を与えるか、このようなことを人に伝えるためには、『浜松中納言物語』のような物語が必要になってくるのである。この物語では、その筋道はすべて夢によって動かされている、と言っても過言ではない。このような考えに立つと、『更級日記』と『浜松中納言物語』の作者が同一人物であるとするのに、あまり矛盾を感じないのである。

夢体験そのものがすなわち、その人にとっての「物語」である、との見方も可能である。たとえば、『更級日記』の夢3においては、姉の夢ではあるが、自分たちの飼っている猫が亡くなった侍従大納言の娘の生まれかわりということになる。この夢物語を信じることによって、夢を見た人と猫、および、死者（大納言の娘）がぐっと近くなる。つまり、事実を事実として記述する自然科学的方法是、人間と関係なく、事実を語るのに適しているが、物語はその逆に「関係づける」作用をもっている。それは物語を語る人、聞く人にとって、自分と他人、人間と動物や物、生者と死者、自分の心のなかの

意識と無意識などを関係づけるのである。そのように縦横無尽に張りめぐらせたネットワークのなかに自分を位置づけることにより、人間は安心して生き、安心して死ぬことができる。

夢6の転生の夢も、同様の考えによって理解することができる。

自分の前世のことがわかるのなどまったくナンセンスと言うこともできる。あるいは、たとい、わかって何の意味があるのかとも言える。この世の外的事実へのみ心を奪われている限り、そうである。

しかし、この世に一回限りの生を受け、そしてただ死んでいくしかないとは自覚しはじめたら、いったい自分はずなぜ生きているのか、どこから来てどこに行くのかなどという根源的な問いに直面させられる。このようなとき、自分の前世の「物語」を知ることが、相当な重みをもって感じられる。このような観点に立って、現代のアメリカで、「リインカーネーション療法」と称する心理療法⁽¹⁾が一定の成果をあげている、という事実もここに述べる価値があるだろう。

作者は、夢6を有難いこととして受けとめている。しかし、それ以後熱心に清水寺にお詣りすればいいことがあっただろうに、そのままになってしまった、と書いている。これを既に述べたように、謙遜して表現しているとも取れるが、夢に対してこれくらい距離がとれていて丁度よかったのだとも言える。夢3のときも、猫を大納言の娘の生まれかわりとして、大切にしているが、そうとは言っても、その猫を大納言の家に連れていったということも書いていな

い。つまり、夢を大切に受けとめるといふことは、多層的な現実を受けいれる、ということである。信ずるか信じないか、真か偽か、などと二者択一を迫る単層の現実には生きているのでは、あまりにも人生が貧困になる。つまり、つまらない夢として棄て去るものも残念だし、自分はこの仏像をつくった仏師の生まれかわりだから、と清水寺に特別扱いを要求するのも馬鹿げている。多層な現実には身を置くことに意味がある。ただ、そのような知恵を物語として伝えるとなると、輪廻転生がそのままに通じる『浜松中納言物語』の語りになるのである。

ものの流れ

これまで夢を中心に論じてきた二つの作品は、そこに共通する主題として、「ものの流れ」ということを感じさせる。ここに言う「もの」は現代人の考える心も物質も共に含んでいる。それは人間の実感としては、「意識の流れ」として把握されるかも知れない。ただ、ここに言う「意識」は夢の体験を含み、西洋の深層心理学者の提示する「無意識」も含んでいる。人間の意志や意図を超えて、滔々と流れ続ける「もの」の勢い、方向を感じとること、これが大切である。しかし、人間はしばしばそのことを忘れ、地位・財産・名誉などに固執する。そんなことは忘れ、この「ものの流れ」に身をまかせるとき、思いがけないことが可能になる。

『更級日記』の最初の方に語られる武蔵国の「たけしば」の伝説がそれを如実に示している。それを要約すると次のようになる。

「たけしば」から朝廷へ衛士として送られた男が、
「などや、苦しきめを見るらむ。わが国に、七つ三つくり据ゑたる酒壺にさし渡したる直柄のひさごの、南風吹けば北になびき、北風吹けば南になびき、西吹けば東になびき、東吹けば西になびくを見で、かくてあるよ」

とつぶやいているのを天皇の娘が聞き、それをもう一度聞きたがる。男がもう一度申しあげると、娘はすぐに決心して男と共に、男の故郷にまで駆け落ちる。後の詳細は略するが、天皇も彼らの関係を認め武蔵国をその男に賜り、最後はめでたしめでたしで終る。

これは何とも素晴らしい話である。皇女の行為はまったく突飛だが、後はめでたく終るところが注目すべきところである。この二人の若者の行動は、天皇でさえ止めようがなく、それに従うしかないのだ。二人の行動を支える原理は、男のひとり言に端的に示されている。つまり、北風が吹けば南に、南風が吹けば北に、となびかざるをえない「ひさご」の姿がそれを象徴している。孝標女は、この「ものの流れ」を感じとる能力をもっていた。だからこそ十三歳の頃に聞いた伝説をよく記憶しており、晩年になったときでも、それを詳しく記載できたのである。

「ものの流れ」と記したことは「もののはたらき」と表現する方が

いいかも知れない。流れを継時的にたどるのみではなく、流れの同時的な在り様に注目することも大切なのだ。京都、吉野、唐などと場所は離れていても、そこに同時に生じることが、大きい「ものの流れ」の一部として生じているのだ。これを全体として把握することが大切である。これら別々の場所に起こることを、ひとつの事象として把握するには夢の助けが必要である。『浜松中納言物語』の夢について、池田利夫が「この物語は、舞台を京都、唐土、吉野と三転させるので、瞬時に両所を結合しうるのは、まず夢を措いてはなからう」と述べているのは卓見である。このように考えると、

『浜松中納言物語』における共時的な夢は、『更級日記』に示された前述したような「ものの流れ」の考えを「物語る」際の工夫のひとつとして読みとれる。

「ものの流れ」が読みとれるならば、「たけしば」の男のように途方もない幸福を得るはずではないだろうか。それにしても『更級日記』の作者は、あまりにも悲しい経験をし、最後は、せつかくの夫の仕官を喜んだのも束の間、夫の突然の死によって「をばすて」と作者自身も呼ぶ境地になっている。そして『浜松中納言物語』の主人公も、最後のところは、「たましひ消ゆる心ちして、涙にうきしづみ給けり」となっている。

これはどうしてだろうか。端的に言えば、「人間はひさごではない」ということだろう。ぶらりとばかりはして居られない。しかし、

「ものの流れ」を知ることによって、人間は悲しくも楽しい生活を送れるのではなからうか。『更級日記』は外的現実の悲しさを書く一方では、歓喜に近い体験をもたらした「阿弥陀仏の夢」を最後に書き記している。これこそ彼女の見た「鏡の両面の夢」(夢5)そのものではないだろうか。彼女は夢によって来世を約束される幸福を味わう。しかし、人間としての彼女はやはり「かなしき」を知る。『浜松中納言物語』において、作者の上記の体験はどのように物語られているだろうか。それは物語の最後に述べられる深い悲しみの感情と、しかし、それを補償する事実として——これも夢によって知ったことであるが——彼の愛した河陽県の後が、この世に生まれかわってくることを、主人公が知っている、ということを示されている。

いずれの作品においても、かなしきの感情が基調をなしているように見えながら、それを補償する「ものの流れ」が、嬉しい事実も用意している、というところが特徴的である。そして、両者共にその事実が夢によって告げられているところが興味深い。

注

- (1) 河合隼雄「明恵 夢を生きる」京都松柏社、一九八七
Hayao Kawai, translated and edited by Mark Umno, *The*

Buddhist Priest Myoe A Life of Dreams, The Lapis Press, 1992.

(2) Hayao Kawai, "Tales of Meaning: Dreams in Japanese Medieval Literature", in *Eranos Conference 1995*.

(3) 以後の引用は、『浜松中納言物語』/『更級日記』とも岩波古典文学大系による。

(4) 參照して夢を待たず、それによって病が癒されるという風習は、古代ギリシヤにひろく行なわれた。力動精神医学の歴史を詳細に調べたエレンベルガーは、「本當の夢」とは非常に特殊な夢のことで、夢自体の中で、治癒が成就する夢である」と述べている。アンリー・エレンベルガー、木村敏・中井久夫監訳『無意識の発見 上』弘文堂、一九八〇

(5) *A Tale of Eleventh Century Japan: Hamamatsu Chuwagon Mongatari*, Introduction and Translation by T. Rohlich, Princeton University Press, Princeton, 1983.

(6) 河合隼雄「とりかへばや」男と女」新潮社、一九九一

(7) 池田利夫「更級日記 浜松中納言物語攷」武蔵野書院、一九八九

(8) 西下経一による解説には「更級日記」に関して「上京の時の紀行は、地理の前後している所が多いから、メモがあったのではなく、全くの記憶であろう」と述べている(『更級日記』岩波古典文学大系)。これらの夢もすべて記憶とするなら、作者が夢を非常に大切と考えていたことを示すものであろう。

(9) 前掲書

(10) 河合隼雄「物語と人間の科学」岩波書店、一九九三

(11) ワイス・B・L(山川紘矢・亜紀子訳)『前世療法』P H P

一九九三

(12) 池田利夫、前掲書。

なお、池田利夫氏とは他の主題で対談したが、その際、本題に関して個人的に教えられるところが多かった。記して感謝申しあげる。